

特別版「六本木 ヒルズの歩き方」(マップ付き)

BRUTUS

2003 5・1 号 ¥550

21世紀都市を
巡る115人が語る

「六本木ヒルズ論」



Structural Design

仁藤喜徳

ガラスの表面に、視界を遮らす熱を遮断する白色のドットを焼き付けることによって、ほわっと白い布を覆ったようなイメージとなるガラス構造体。仁藤さんの本拠地はアメリカ。日本を征服しながら画期的な構造体を実現させた。

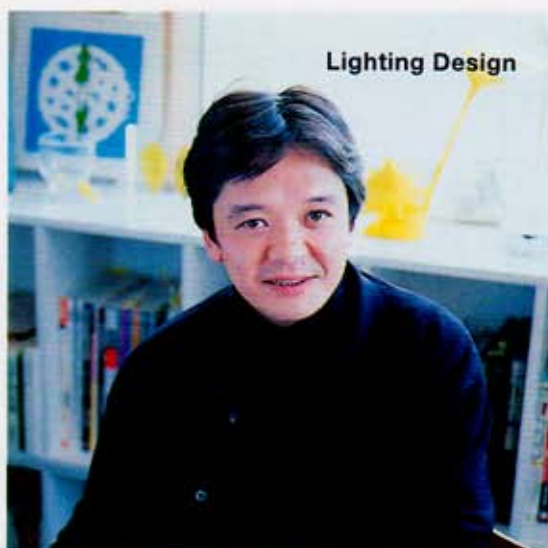


浮遊する水平鉄骨リングで支持されたガラスの構造体。

合計268枚のガラスで覆われた構造体（縦20m、幅20m×18m）は、厚さ22mmで統一された12枚の精円水平鉄骨リングと直径17.5mmのケーブルで構成され、地震や台風などの外力に対して驚くべき高い強度で抵抗する。この〈森アートセンター〉の入口として相応しいミュージアム・コーンの内部には、ファネルと呼ばれるエレベーターシャフトと螺旋階段が3階レベルまで続いている。「建物全体がひとつの殻（シェル効果）として機能することによって、類似する建物に比べて約2倍の強度と剛性を確保しているにもかかわらず、合計鉄骨量は約半分で済ませることができる構造体を提案、実現することができました」（構造家／仁藤さん）

柱などの鉛直材が存在しない、浮遊する水平圧縮リングと単層斜めケーブルのみで構成されたケーブルネットシェル構造は、世界初の構造体と断言している。

「世界でも例のない構造体であることから、実現に向けて数百回に及ぶコンピュータシミュレーションを繰り返して、構造解析を行い、その結果を実験と照らし合わせ安全性の確認を行いました」形状が精円円錐形であるために、それぞれのケーブルとガラスの位置、傾き、形状が異なる。それに対応できる機能を手作りで構築した鉄とガラスの彫刻品のような風格だ。



Lighting Design

内原智史

右はライブやイベントが日中押し迫るアリーナの照明プランの一部。開館的な室外空間のテーマは「命を産む光、音、水」。内原さんは京都出身。京の夜祭りの明かりが燈籠祭りのようだ。愛宕グリーンヒルズの照明も担当している。



目で「風」を見えるようにした照明のマジック。

六本木ヒルズの真ん中に位置する〈六本木ヒルズアリーナ〉。ここと隣接する〈毛利庭園〉のライティングを担当したのが、京都の金閣寺などのライティングデザインで有名な内原さんだ。

庭園内の光は、作られた「自然」ではなく、自然の「表情」（エッセンス）に触れられる場所。そんなコンセプトで発案されたのが、「風や音に反応する光の空間」。その時々、吹いている風によって、日本庭園の庭園灯がその風に反応して揺らめいたり、光の「波紋」が周囲の樹木に映るような計算もしている。アリーナでは建築物に潜ませた光源が異なる色に輝く。最高16万色の色の微妙な加減をコントロールすることもできる。

「要するに、目で風を見えるようにしたんですよ。雲の流れの画像を読み込み、それを光のイメージに置き換えることもできます。また、ライブなどさまざまなイベントでのオーディオに光が反応し、人の声にも反応します」と内原さん。

音・水・光の構成要素を生かし、1日の時間の変化（出勤時、ランチタイム、ディナータイムなど）や、季節をイメージする色をテーマとした構成で季節感も加わるように配慮。六本木ヒルズに住む人も訪れる人も、最先端の都市にいながら、光のマジックによって癒しと清涼感をも手に入れることができる。